

南大東と宮古の旅

組 原 洋

まえがき

以下に記すのは、1994年3月から4月にかけて、南大東島と宮古島を訪れた時の記録である。

私は93年から94年にかけて、沖縄のいわゆる米軍用地小作人訴訟について調べていて、その結果は本研究所年報5号（1994年3月刊）に「1959年の沖縄」と題して発表した。このとき、大東と宮古の製糖業の現状を実地に見ておきたいと考えた。それがこの訪問の直接の動機である。実際にいってみたら、両者は同じ離島といっても全然状況が異なっていた。その違いが興味深く思われたので、旅行直後に作成した記録を並べて掲げる。（94・8・24 記）

I 南大東紀行

1

3月25日頃、飛行機のことを旅行会社で聞いたら、帰りは4月3日で取れたが、行きが満席で、31日の2つある便をキャンセル待ちすることにした。

26日（土）に、電話で、29日に船が出ることが分かった。生盛さん（沖大卒業生）が、船なら一緒に行くというので、船で出発することにまず決めた。

28日（月）午前中、泊の船会社に行ってみた。北に行って1～2時間いてから南に行くそう。その間に北を見れますかと聞くと、見れるでしょうと。素晴らしい。1～2時間で十分であると。そんなに小さい島なのかとびっくりした。南には24時間停泊するそうで、こちらもこれで十分でしょうと。乗り物はと聞くと、ここに連絡してお願いすれば準備してくれるとあって紙をくれたが、南大東村港湾課と北大東（株）事務所とである。混み具合は、天候次第だそう。天気が悪いと飛行機の客が船に流れるので混むと。天気はいいんだが、でも買っておいの方がいいみたいなのとも言われたので、私と生盛さんの2人分の切符を買ってしまった。すでに泊南岸に停泊している「だいとう」を見ると、小さい（699トン、定員55人）。

乗り物は自転車がいいんじゃないか。午後、生盛さんが来たのでそういうと、彼も賛成し、彼は友達から借りるという。生盛さんの妹さんがもらってきて使っていない自転車があり、これが娘にはいいんじゃないかという話を、大東の話とは無関係にしていたが、自転車なら娘も一緒にどうかということになり、娘に行きたいかと聞くと、行きたいということで、話はまとまった。夕方、生盛さんのところで散髪してもらってから、娘に自転車をもたらしてきた。

29日朝、娘と泊に行って娘の切符を買った。娘の自転車と娘の運転が大丈夫か試す意味もあった。自転車はいつごろまでに持ってくればいいのか聞くと、午前中までにというのである。ええっ、そんなに早く。早くしないと載せる場所がなくなるかもみたいなことを言うのである。そもそも我々自身も早く乗らないと寝る場所がなくなるかもしれないというのである。そんなに混むのか。

で、帰って何度か生盛さん宅に電話したが誰も取らないのである。結局、1時半頃やっとつながった。で、すぐ来るということで、2時過ぎやって来た。生盛さんは、バレットの地下の食品売り場で働いているおばさんのところに用事でまず寄った。おばさんは弁当をくれたそう。それから、ブリジストンに行って、生盛さんは鎖鍵を買った。友達の自転車なので盗まれないようにということか。立派なサイクリング車である。私もズボンを買ってとめるゴムバンドを買った。

それから、港の「だいとう」の前に行った。手荷物用のコンテナがあって、そこにいれようとしたら、乗船してすぐ横のところに置いて、ひもで縛って固定するようにと。料金はただである。自転車の運賃は1710円ということになっているが、これは人がついて行かない場合のことなのでしょう。切符を切ってもらって中に入ると、旅客船室の手前がベッド、奥の2部屋が床式である。床式のところに案内される。この部屋で最初だったので、奥のテレビの前を陣取る。それから、生盛さんと近くのスーパーで、水、紅茶、コップ、スナック、ビール等を買ってくる。

徐々にお客はやって来たが、なかなか時間がたたない。何しろ3時に乗り込んだんだから。結局、我々のところは定員10名の部屋に7人だった。我々の隣に陣取った青年が英語の書類を読んでいるので聞いてみると、環境NGOで、2日前だったかネパールから東京に着いてこっちに来たそうで、残すべき自然があるのかないのかの調査のために大東に行くんだという話だった。ベッドが1つ空いているよ、と言って、娘に使わないかと言ってきたが、娘は断わった。ベッドを使うのに特別な料金はいらないのである。予約できていればいいのである。早いもの勝ちなのである。

まあこういうことで、予定の5時半を少し過ぎて出発した。岸壁をちょっと離れたところ

ろで遅刻してきた3人がタクシーで着いて、船はもう一度港に近づいて3人を乗せた。横浜からソ連に行った時のことを思い出した。同じようなことがあった。

船が本島から離れていくのを見て、それからビールを飲んだ。そしてちょっと寝た後、夕食を食べてまた寝た。

2

30日、朝6時頃目が覚めた。快晴で風もない。すでに島が見えていた。甲板に3名ほど寝ていた。内2人はカップルである。北大東に近づいて、生盛さんが交渉したが、北でおりることはできないという。7時頃着いた。なるほど岸壁である。あちこちから船をロープでゆわえてから、クレーンを使って人を降ろしたり荷物を降ろしたりする作業が始まった。なかなか大変である。一時降りたいなんて頼める空気ではないし、実際、時間も無い。8時過ぎに作業が終わって、南に向かった。

南には9時半頃着いた。最初に人を降ろし、その後から荷物。さあ、自転車だ。坂を登っていく。登り終えたところに四つ角がある。曲がらずにまっすぐ行くと右カーブして、坂を下りたところがもう中心近くである。民宿は金城というのが1軒あって2000円。素泊まりしかできず、食事が無い。旅館は元農協会館の吉里会館というのがあって、2食ついて4700円ほど。吉里会館の方にした。部屋に蚊がいる。電気の蚊取り線香をつける。荷物を置いてすぐに出た。

最初にいったのは民俗資料館である。建物の前に展示されているシュガートレインを見ているうちに、生盛さんが隣の教育委員会にいて、係の人と戻ってきた。鍵を開けてくれた。民具が雑然と並べられている。これから裏手にちゃんとした建物を建てる予定だそう、その準備だということだった。民具の提供者の名前を見ると、本土の名前もあるし沖縄の名前もある。係の方は若い人で、大東文化大学を出た方だったが、感じで、すごいインテリのように見えた。本土の顔だ。公民館というのではないらしい。したがって講座などもない。そんなもの、やっても誰も来ないよと。医療施設が貧困なため、重病人等は本島に送るしかない。結果として、死ぬまでこの島にいるということにはなりにくい。そうすると、老人の少ない島になり、島の伝統みたいなものもできにくい。経済に関しては少なくとも現在までのところ、さとうきびで引き合う形になってきている。1家族あたりで平均8.8ヘクタールだそうだから、本島などと比べるととても恵まれている。そして機械化も進んでいる。ただ、機械を導入する際に借金したりしてつまづくケースもあるそうで、必ずしも均等ではなく、差がついてきているということだった。土地の売買はあるということだった。売買の理由もさまざまだ。

統計等は役場でもらった。役場のそばの店にパンがいっぱい置かれていて、おばさんたちがあさるようにして買っていた。島内では作ってないのだな。船が着いた時だけなのだ。西表と同じだ。

それから、社会福祉協議会にもいってみた。閉まっていたが、通りがかりの役場の人が説明してくれたところでは、村の社協が法人化したのが93年4月だそうで、まだ事業もちゃんとできていないし、資料等もないということだった。よくも悪くも老人は少ないそうで、つまりは、この島は労働現場なのだ。

これだけ回ってほしい感じはつかめた。じゃ、サイクリングを開始するかということで、まずは大池まで行ってみようということになった。途中、大東神社を通るので寄ってみた。女の人が2人、食べ物を置いて座っていたが、これは本島の拝所でよく見かける後景である。生盛さんが、神社といっても、本土と沖縄が混ざった感じという。

それから、大池まで走る。自転車でちょうどいいサイズだ。道に大きな蛙が、べちゃんこにひかれて死んでいるのに何度も出くわす。最初はたまたまかと思ったが、そうではなく、島内のいたるところで見かけられる。娘は、最初は数を数えていたが、余りに多いので途中で止めてしまったようだ。腹が減ったので、大池まで行って、後は時計の針回りに回って帰ってきた。畑はほとんどがさとうきびである。区画は聞いていたように大きく、かなりが収穫が終わって、赤い土が出ているが、まだ作業は続いている。家も、聞いていたように畑の中にぼつんぼつんとあって、トタン屋根が多く、粗末に見える。材料が貧しいのでしかたない。聞くところでは、砂がないので、外から持ってくる必要があればならず、セメントと同じ値段だとか。帰ってくる途中、飛行機が着陸するのが見えた。小さいな。

宿に戻ってきて、その前の食堂「いさ」に入る。ここのお兄さんが、私の友人の島袋隆さんにそっくりである。ヤンバルから来ている人も多いと聞いていたので、もしやと思って聞いてみると、確かに島袋さんの出身部落（名護市羽地の稲嶺）と同じ部落から来た人だった。すごいなあ。値段は野菜炒めが600円、カレーが500円。

午後2時まで昼寝した。それから、生盛さんが葉書を出したいということで、郵便局に行くと、南大東の絵はがきがスーパーにあるということなので、宿の斜め前のスーパーまで戻ってきて買って、書いて、投函した。それから、日の丸山の展望台に行った。島が見渡せる。位置が島の南部ではあるが、北大東島も見える。ここから畑を見渡すと、さとうきびをもう刈った所が多いが、まだ全然手つけずの場所もある。翌日大東製糖で聞いたところでは、ブリックスの高い所から刈っていくのだということだった。

続いて海軍棒プールに行く。岩を掘り込んで作った海水プール。大人の腰までで浅い。魚が泳いでいる。ここから北の方が南大東島東海岸植物群落。ここでしばらく遊んだ。こ

の斜め上のところが新空港予定地である。さあな、問題ではないのかな。

この後、今日見られるかどうかはともかく、鍾乳洞のある所に行ってみようということになった。これは島の西海岸近くなので、東から西に横切る形になる。サイクリングに絶好だ。走っていると大きなバツタがぶつかってくる。

「離島情報ガイドSHIMADAS'93」(財団法人日本離島センター・1993年)に、星野洞という鍾乳洞が93年10月頃公開の予定とかかかれている。見晴山(といっても海拔36メートルで、山なんてもんじゃない)あたりに出て、あれかと思当をつけて行くとあった。しかし鍵がかかっているようだなあ、と思ったところに、車がやって来て、これが役場の人(産業課)で、観光客を案内してきたのである。それに便乗させてもらって、我々も洞を見学した。玉泉洞と比較すると、とにかく深い、こちらは。ものすごくおりて行く感じである。同時に、ものすごい湿気でもある。照明とかの施設は、玉泉洞と似ている。

この後、もうちょっと北の西海岸に出た。伊佐釣場のあたりだ。実際に、釣りをしている男の人が1人見えた。生盛さん1人がそっちに行って、かなり長いことはなしていた。あとで聞いた所では、体中入れ墨のヤクザだったそうだ。父親だか母親だかが八丈島だそうだ。魚は全然釣れないと。じゃ、何してるのかねえ。大声を上げて話していたらしく、娘も、「頭に来る」とか本土の人みたいな話し方だと言っていたのだが、話の内容も、沖縄ってのは日本人のはずなのに、日本人じゃないよみたいなのだったそうだ。ああ、なるほど。島に来て、確かもう3年とか。空が青い。海も青い。我々は最高の天気恵まれたが、こういう日ばかりじゃないだろう。運だなあ。

帰りに、星野洞のそばで畑仕事していたおばさんに声をかけてみた。何してるのかと思ったら、ひまわりを間引いているのである。ここは観光地だからと、お客さんのためにひまわりをまいたら、一昨年はでき過ぎだったそうだ。で、間引いているんだと。

宿に帰ってすぐに食事にした。船や、鍾乳洞で会った人達が食べている。部屋は、クーラーがつかないと、昼間生盛さんがいったせいか、かえてくれてあった。新しい部屋は湿気が少なく、蚊がいない。風呂に入ってビールを飲んでいたら眠くなってきた。生盛さんと雑談していたら、帰りの船は満員だときいたというのである。冗談じゃない。マネージャーにききにいった。すると、建前上は満員ですとこともなげに言うのである。しかし、100名までは乗せますからと。どういうことなのか。しかし、とにかく乗れることは確かなようなので、明日にする。

生盛さんはそのあと、飲み屋に行ってみたそうだが、ホステスも客も年寄りばかりでつまらなかったと言っていた。フィリピンと書いた店があるが、そこには行かなかったそう

だ。

3

31日、朝食中に、まずは船会社の事務所に行こうということに決めた。事務所は港のすぐそばである。9時からというので、荷物をまとめてフロントに預け、自転車で出発した。

事務所で聞くと、南の分は確かに満員で、切符は発行できないと。しかし、北の分の空きが出ればその分乗れると。結局乗れそうなのだが、11時頃になるまで、空きが出るのか出ないのか分からないというのである。だから予約もできないと。早い者勝ちですと。変なシステムだなあ。今日帰れないと大変なので、11時まで待つしかない。2時間待たされるのは痛い、しかたない。私と娘とで待つことにし、生盛さんに、夕方の弁当や、土産の大東ようかん、タロ芋を買ってきてもらうことにする。空を見て、ボーッと待つのも悪くない。何しろ昨日一日走って、尻が痛い。事務所に腰を下ろし、じっとしていると蠅が多いのにあらためて驚く。やがて、事務所のお姉さんが椅子を出してくれた。時々地元の人らしいのがやって来ては帰って行く。旅行者は来ない。もう切符を持っているんだろう。我々は、何というか、自転車で走り始めて興奮して、帰りの切符のことはすっかり忘れていた。出発前に那覇の事務所では帰りは大丈夫といわれたこともある。やがて、生盛さんも帰ってきて、話したのは、多分島だから、地元優先だろうと。地元の人是我々みたいに待つ必要はないのだろうと。そういう話をしていたのが聞こえたのかどうか分からないが、とにかく10時半頃になって、名前を書くように言われて、1番で切符取りましょうねと。これ、予約ではないのか。あと、1時頃来てくれればいいですと。意味がよく分からない。旅行者に同情して特別に親切にしてくれているのか。あるいはまた、私がヤマトンチュウだということが影響しているのか。どうかな。

とにかく1時まで自由になった。宮城仁四郎氏の銅像が93年にできたそうだと。それを見に行こうということになった。場所は分からないが、中心部に決まっている。港から上る途中に墓なのか地蔵なのか、そのようなものがあり写真に撮った。坂を上がって最初の四つ角で右に折れて行ってみようということになった。坂を下って行くと、工事現場に出た。昔の列車の軌道を今、散歩道につくりかえているところだそうだと。散歩道なんかなくても、農道で十分なようにも思うんだが。そもそも、この島に大量に観光客が来るだろうか。交通機関が整ったとして、どうなのか。

工事のおじさんに道を教えてもらって宮城仁四郎氏の銅像に出た。小さい人なんだな。銅像の台の横に、宮城仁四郎翁を讃える文が刻んであるが、そこに、「知識を知恵に 独

創を創造に転じ 数多の業を興し 業と共に生く その光芒は消えず 琉球弧に輝く」とある。凝った文章だな。

大東製糖工場がすぐそばなので、工場見学させてもらった。案内してくれた、年配のおじさんはとてもいねいで親切だった。この工場が本島の工場と一番違うのは、持ち込まれたさとうきびの最初の処理の仕方にあるようだ。葉を落とすのに焼く方式と切る方式があり、前者だと肥料にした時に土が酸性化するとかで、後者なのだということだった。とにかくぐるっと歩いているうち、ざらめが積まれている所にたどり着いたのである。

農民株のことなど、事務所の方で聞いてみたが、返事が得られなかった。分からないせいなのか、警戒したためなのか、いずれなのかははっきりしない。空気はよくなかった。

昼になったので大東鮎を食べようと鮎屋に入ったが、昼はできないようである。それで「いさ」でソバを食べた。そして、荷物を持って港に戻った。

1時過ぎに切符が手に入った。何とベッドが取れているのである。意味が分からない。乗るのは3時頃らしいのだが、もうじっとしていようということになった。待っているうちに徐々に人が集まってきた。「いさ」のお兄さんが学生を連れて港にやって来た。女2人、男1人。和光大学の冒険部だそうだが、民族資料館の横でキャンプをしていた。港のすぐそばだというので、「いさ」のお兄さんに、金比羅さんに連れて行ってもらった。船がやって来て、乗り込んで、港を離れてからも、1時間余りも港が見える所にエンジンはかけずに浮かんでいた。何しているのか何も放送はなかった。まあそういうもんなんだろう。

ベッドはきわめて上等だった。ビールを飲むと私はすぐに寝てしまい、途中ちょっと目が覚めたほかは翌朝まで眠った。弁当は、翌4月1日の朝、沖縄本島が見え始めてから食べた。8時前に港について、ラッシュの中を、家まで自転車で帰った。ずいぶん長らく旅行していたような気がした。

(94・4・5 脱稿)

II 宮古旅行

1

4月9日から11日夜まで、宮古に行っていた。生盛さんが先に6日の夜、船で宮古に向かった。仲宗根均さん(沖大卒業生)とあらかじめ連絡を取って行って、彼の家に泊まることになった。7日夜に生盛さんから電話で、いつ来るのかというので、まあ仲宗根さ

んに、調査に協力してもらったお礼も兼ねて会ってくるのも面白かろうと思い9日（土）の朝の便でいった。

9日は、昼過ぎまで仲宗根さんが、「観光」ということで、宮古本島を回ってくれた。

平良市総合博物館のところを通過、北側の浜を見ながら保良に出た。ゴルフ場予定地があった。東平安名崎まで行ってから南側を戻ってきて、保良川公園（崖の中腹から湧き出る地下水を利用しプールが2つつくられている）、「自殺の名所」、ふるい墓、太陽熱発電施設、上野村ドイツ文化村等を経て、下地町に入った。熱帯植物を見ながら前浜、与那覇湾、そして平良の港湾工事を見て仲宗根さん宅に戻った。

午後は生盛さんは風邪をひいたようなので、私は、仲宗根さんや、仲宗根さんのお母さんと話した。これから平良市長選挙で、仲宗根さんのところは現職（下地米一氏）の応援をしているようで、仲宗根さんのお母さんはそのため夜は出かけていたのだが、色んな紙というか、資料を持って帰っていらっしやって、下地氏の2期8年の間にこんなによくなったということが色々書かれていたのだが、その中に所得比較があって、それを見ると、平良は上の方なのに、他の町村はびりに近い（南北大東が豊かなところだということが、これではっきり分かった）。下地氏の対抗馬は、伊志嶺亮氏であるが、この人は仲宗根さんの親戚になるらしい。島の選挙ってのはこんなもんなんでしょうね。この日の朝刊でちょうど、細川首相の辞任が伝えられたところで、仲宗根さんの勤めている平良市役所でも8日あたり、大変だと騒いでいたのだそうである。何しろまだ予算が通っていない。

9日は、朝、仲宗根さん、生盛さんが空港に出迎えてくれたが、特に仲宗根さんはひどい二日酔いのような感じだった。入学祝いのシーズンで、親戚、職場等で関係がダブるので、多い人は大変だそうだ。だから、8日に生盛さんが伊良部の社協にいったら、下地信広氏は休みだったそうだし、伊良部の役場もがら空き状態であつたらしい。で、酒はもう飲めないといい、夜は近くの店でビール1杯だけで食事した。私はアバサ汁を食べた。こりこりした歯ごたえ。

2

10日は、生盛さんの希望で、2人で池間島に行った。車は、仲宗根さんが貸してくれた。生盛さんが8日に伊良部を訪ねた時、佐良浜で、伊良部と池間とは人がつながっているみたいなことを聞いたそうだ。それを確かめにいこうと。島を一周してから港に行ってみて、それから部落に入っていく。思ったより多くの家があった。93年版SHIMADASでは人口801人であるが、今はもっと減っているだろう。どういうふうにとっかかりを見つけようかと思いながら進むうち、工事中で進めないところに出た。その横の家

の窓からおじさんが顔を出していて、そのおじさんに話しかけた。家の中にある賞状から山口さんという名前だと分かる。しかし、本土ではない。もと漁師で、奥さんは昨年亡くなったようだ。子供たちもみんな平良等に出て、1人で住んでいる。寂しくないというんだが寂しいだろう。池間の古い話を知っている人はいないかと聞いたら、前泊徳正さんという人がいる、と。で、車を公民館前に置いて、その家を探していったが、雑貨屋のおばさんが言うには、昨日救急車で病院に運ばれていないそうだ。85歳位らしいが、1人暮らしであったそうだ。そうかあ。部落内を歩いているうち、学校に出た。日曜日だったが用務員のおばさんがいて、そこで生盛さんは自治会長を紹介された。今度はその家を探していった。前川光得氏で、池間公民館長でもある。いってみたら本人がいたが、明日午前中にしてくれないかという。で、引き上げた。帰り、道を間違えて、遠見跡に出た。神社もあった。それから港に出たが、大漁旗がさっきは立っていなかったのに立っていた。池間島離島振興総合センターである。入ってみるとホールで、係の人が1人いて、譜久村さんという方で、まだ若かった。SHIMADASが置いてあるのにはびっくりした。何でも、島出身の歌手の公演があるのだそうだ。催しはだいたい、公民館ではなくこっちでやるそうで、実際、公民館の方はさびれた感じである。大宜味と似た状況である。コミセンの方は、平良市の企画系統のようである。譜久村さんが、もうずいぶん昔のことだが、池間から伊良部に集団移住させられたことがあると話してくれた。この日、池間ではここが一番まともな受け答えをしてくれた。橋の手前で、コーリャンまんじゅうと、びん詰を買ったが、匂いかいでいたら、女の匂いがするでしょうと。橋を渡ったところでそばを食べた。男女と女の子が食べていて、親子かと思ったのだが、しかし女の子は男のことをお兄さんといっていたそうだ。愛人と連れ子かなあ。わけの分からんのが多いねえ。

ついでに大神島にいてみることにした。車で島尻漁港に行ったら漁師に聞くと、船は5時半だというのである。ボートをチャーターできないかと聞いてみると、ちょうど潜り漁を終えて帰ってきた漁師のおじさんに声をかけてくれて、多分くたかったのだろうがいつてくれることになった。1人1000円だというのが、まあ船が遅いせいもあるのだが、たっぷり時間を食って、気の毒で、生盛さんは3000円渡していた。

船から降りてみると若い男の人が近寄ってきた。もみあげを伸ばしているせいか、ユーモラスな顔つきで、笑ってしまう。ほかに、子ども連れの観光客らしい一団がいて、定期船で先に着いたのだろう。遊園地にあるような屋根のない、しかしちゃんとした車に乗って左手の方に出発するところだった。もみあげを伸ばした青年とまず話してみると、この島は本土のサイタマの方からやって来た海賊の子孫がすんでいる島だみたいなことを、まじめな顔をして話し出した。先日、世界ほらふき大会というのが宮古で開かれて、1位に

なったのが宮古の人で、その話というのが大神島に財宝が発見されて云々というもので、それでこの島の名を記憶していたのである。その伝かなとも思った。SHIMADASには海賊キッドの「宝島」伝説があると書かれている。もみあげの青年に、何してるのかと聞いてみると、休んでいるところだというのが、話を聞いていたら、埼玉県の自動車工場に出稼ぎに行って、多分適応できなくて帰ってきたんじゃないかと思われる。まあ誰だって自動車工場の労働なんかには適応できないだろうが、この人の場合、受けた傷が大きかったようだ。

ともかく、家族連れとは逆の、左手の方から行ってみることにした。道をちょっと行くと、浜辺で貝を拾っているらしい女の人が一人いた。全身を衣類で覆っている。地元の人のように。袋の中に小魚がたくさん入っていて、その内臓を出しているところだった。岩陰にいるのを手で捕まえたとか。もりも持っている。我々にシャコ貝をむいて食べさせてくれた。まげの青年ことをきいてみると、頭がおかしいんだそうである。やっぱりそうなのか。

道はこの先行き止まりだということで、もとに戻って、右手の方に行った。すぐに登り道になる。小中学校とか大神島離島振興コミュニティーセンターとかのあとは民家になる。それもほんのちょっと。何しろ、SHIMADASによれば人口64人である。ちょっと登ったところで、家族連れの皆さんが、船会社の事務所でお茶を飲んで談笑していた。さらに進むと家はおしまいになったが、そこでおばさんと、それから寝巻きみたいな着物を着た、歯が1本しかないおばあさんとに会って、立ち話した。さらに登っていくと畑もおしまいになり、やがててっぺんに出た。しばらく休んでいると家族連れが登ってきた。東京から来たそう。考えると、直行便が飛んでいるから、来ようと思えば簡単である。ただ、顔は沖縄の顔だから、沖縄出身者なんだろうと思う。入れ違いに下りて、さっき家族連れが休んでいたところで、帰りの切符はここで買うんじゃないかとおばさんにきいたついでに雑談した。この男たちは、昼間は宮古本島に土方で働きに出ているそう。定期船では日に3便で少な過ぎるので、別の船で行く。宮古本島についたら送り迎えがあるそうで、島に帰ってくるのは毎日夕方の6時半頃だそうである。どうして本島に住まないのかなあと不思議な気持ちになる。すぐ隣に店がある。というか、店もある。下に降りて、右手の海岸に沿ってもう1本道があるのでいってみると、すぐに行き止まりで、土地をならしているところのようで、何かの敷地にするのではないかと思われた。その前の海岸は岩で囲ってあって、これは泳ぐためではなく、漁のためだろう。

港に戻ったらまたもみあげの青年に会った。土方に行くとき日当6500円だとか。写真を撮りたくて、写真はどうかときいてみると、もう飽きてしまったよといい、顔なら鏡を

見るからというのである。そんな話をしていたら、突然、なぜ笑うんだと怒り始めた。そして、ブンとして我々から遠ざかってしまった。やっぱり病気だな。やがて5時になって船が出たが、その前に青年はどっかに行ってしまった。

船室にいたら、家族連れのほかにも旅行者が乗ってきた。若い女性の4人連れと、リュックをしょった1人旅の人。この人は、3月31日から4月1日にかけて南大東から那覇に向かう船に乗っていた。ずんぐりした体つきで、私は女だと思ったのだが、生盛さんの意見では、ひげがはえていたから男だと。それにしても、この人も何してんだろ。話を聞くと、1月頃からゆっくりゆっくり島を回っているらしいのだが。ルポライターか何かかなと思ったが、少なくともそれで生活ができるわけじゃないので、仕事とは言えないと。島では会わなかったが、どこにいたんでしょね。

帰りに平良市総合博物館に寄ってみたが、すでに閉まっていた。翌日は月曜で閉館なので、今回は見れなかったことになる。まあいずれまた来るから。

仲宗根さんの家に帰ったら誰もいなかった。で、古本屋に行くことにした。そこに、今行って来たばかりの大神島の写真集があった。勇崎哲史「大神島 記憶の家族」（平凡社・1992年）である。見れば、さっき会ったばかりの人々が出ているではないか。いやあ、びっくりした。この写真集は、以前見たことがある。それが大神島だとは、全然記憶になかった。その時は、何かすごい離島という感じで写真を見たのだが、実際には、小さな船で30分内外で行けるところなのである。写真集の最初に、「土曜日の放課後、引き潮の海を歩いて狩俣の浜に向かう校長先生…1972年10月7日」という写真が載っている。確かに、珊瑚礁の海だった。今は船のため水路をつくったようである。このちょっと北のところに、有名な八重干瀬がある。

古本屋ではその他に、伊良部村史、池間島出身者の文集、宮古の研究雑誌等を買った。

仲宗根さんの家に帰って、シャワーを浴びて、休んでいたら、お母さんが帰って来た。ごちそうを作ってくれた。食後、私は上に上がって、早々に寝てしまった。

3

11日、起きると小雨が降っていた。仲宗根さんが、今日も車を使っていいといってくる。まずは、8時過ぎ、市場に行ってみる。まだ開いていない店が多い。それから、池間島に向かった。9時過ぎについて、前川光得氏宅を訪ねた。奥さんがさざえを出してくれた。前川氏は、池間島の歴史年表をコピーしてしてくれた。しかし直接伺ったのは、現在のことである。橋がかかって相当変わったと思うのだが、現時点でどう思うかといったあたりから尋ねてみた。前川氏の返事は、いいの悪いのというより、島の活性化のために

はこうするしかなかったのだと。ここも、高齢化というのはきわめて深刻である。子どもも1人残らず島から出てしまう。1人ぐらが残れないのかと思うんだが、だめだそうだ。現に、前川さんのところもそうである。こういうふうだと、池間民族がどうのこうのといっても始まらないわけである。で、自治会長として島に特養老人ホームを誘致する運動をして、これは実現の運びになったということである。30人ぐらい収容で、全員が入れるわけではないらしいが、言うところでは、若者が帰ってくる見込みもないわけだから、せめて残った年寄りが楽しくできるようにしようと。そういうことでいろいろ陳情すると、お役所がバラバラであることも実感として分かるようで、例えば、池間島離島振興総合センターも、最初は池間島公民館のところに合併してできるのかと思ったのだそうだが、別々のものになった。漁連なんかも本当はいらない、という。しかし、できればできたでいいんだそうで、だからいかんというのではないらしい。だいたいこういった、夢があるようなないような話が一段落したところで、平良に連れていってくれないかと頼まれた。選挙運動なのである。郷友会関係をまとめるのである。そういうことで、昼にまっすぐ平良に戻って来た。池間島を立ち去る時、屋内で花札をやっているのが見えた。

本当は図書館等について資料収集したいのだが、月曜日はこういった関係はすべてお休みのようである。やむを得ない。で、仲宗根さん宅に戻った。体も疲れたので、そのまま休んでいたが、3時頃になって出て、喫茶店にいこうということになった。しかし、純喫茶というのがなかなかないのである。ゲームの店ばかり。結局あっちこち走ってから、平良市役所の隣の喫茶店に入ってきた。平良を走っていて、美人が多い島だとあらためて驚嘆した。生盛さんが言うには、本土の人が沖縄の女ということでイメージするのは宮古の顔ではないか、と。

あと、仲宗根さん宅に戻ってから、空港に行って、那覇に戻った。東京行きの飛行機が我々の便の直前に飛んだ。大きい飛行機で、たぶんがら空きだろう。トランスオーシャンの機内誌「Coralway」94年若夏号に、島旅専門家・河田真智子さんの「ふるさとだと思う島にめぐり合えたら素敵じゃない」という文章が載っていた。彼女は、島の愛好家集団「ぐるーぶ・あいらんだあ」の主催者だそうだが、生盛さんは、かつて奄美に船で向かった時、ここに所属して動いている女の人に船内で会っている。島は年寄りだけになり、そこに、東京とかの大都会から、若い、といっても27〜8ぐらいからだ、いったんは働いたけれどやめて、いまだ行き先の定まらない女たちがやって来て、場合によっては住み着いてしまう、そういう具合になってきたらしい。

(94・4・13 脱稿)